



— 序 —

この物語は、侠客の治める無頼の坂東「刀郷」の地で、刀を振るい、刀に生き、そして逝く。士魂を遺しゆく者達を語りゆくモノである。

「血塗られた道であろうとも、人は意義あるモノにしていける。その道が辛苦に満ちていようとも、己の信義に誠実で在ろうとし続けるならば、  
そう。」

戦い続ける事こそが、人として正しき姿なのだ。  
例え己が手が血に塗れようとも、  
誰かと自らとをも殺し続けた果てであろうとも、  
そこに新たな道も開けよう。  
流された血が、

失われた命が報われる日もこよう。」

第二十五代 獅士堂  
坂本春花の言葉より

緋蓮

# 舞台 及び時代背景

## <刀郷・自治区域>



獅士堂武俠譚——。

舞台は関東一円。

大政奉還の折、將軍慶喜公は帝にある進言をした。「幕府による政の終わりに伴い、「侍」という身分も無くなる事となりましょう。しかし、この日の本の国を、その歴史を拓き築いた大和の魂。神器でもある「刀」と、それを振るう者達を遺してゆくことをお赦し願いたい」…と。

無用の流血と、幕府の解体に反発的な多くの者の憤りを鎮め、速やかに政変を成す妙案とし、朝廷はこれを是とした。

かくして、かような大義の下、江戸周辺の幕府直轄地「常州」「総州」「房州」「武州」「相州」(現在の東京、千葉、埼玉、茨城、神奈川)は、拠り所を失った旧幕閣諸氏、士階級の者達、そして武を頼りにしていた浪人等が集まり、自治区として一つの郷となった。

こうして「刀」に生きる者達の国土”刀郷”が発生した。

——時に西暦1869年。

<登場人物紹介>

坂本雪絵 さかもと ゆきえ

物語の主人公。当年にとって二十歳の女性。

刀郷において強大な力を誇る、ある一家の頭。

女性でありながら、圧倒的技量の刀の遣い手。

織田左馬ノ介 おだ さまのすけ

雪絵の属する組に共にいる義姉弟。十九歳。

幼少の頃より雪絵と共にある、理解者。

様々な面で雪絵をサポートする、「最強の右腕」

高杉千夏 たかすぎ ちなつ

刀郷のある武侠の一家の娘。十五歳。

侠客の家の事情から離れ、堅気の学生として暮らしてきた。

高杉勇人 たかすぎ はやと

千夏の兄。ある武侠の一家の後継者。

千夏にとっては、こころを傾ける”大切なひと”

清家仁美 さやか ひとみ

雪絵の一家の傘下の組の令嬢。

雪絵とは仲の良い友でもある。

信斗 のぶと

勇人の幼馴染にして義兄弟。千夏とも親しい。

白峰 しらみね

雪絵の一家の大幹部の一人。組内においては最古参にあたる。

黒原 くろはら

雪絵の一家の大幹部の一人。白峰の愛弟子の一人。

and more...

<用語解説>

◆刀郷　　とうきょう

明治維新とともに発生した、関東一帯に設けられた自治区。

その存在意義は、日本を築いてきた「刀」と、それを振るう者、「武士道」の精神を体現する者達を後の世に遺していくこと。

その統治は、二大武俠一家、辰ノ神（たつのかみ）と獅士堂（ししどう）によって長らく安定して治められてきた。

◆武俠　　ぶきょう

基本は任侠者の組の用心棒や、抗争の手駒となる「武人」。

かつての「侍」とは違い、組に忠義をもって仕えているのではなく、自らの「刀」を振るう場を与えてくれる任侠者への「義」で動いている無頼漢。

任侠者達と武俠は、刀郷において区別されて認識されている。

刀郷では、武俠が組を構える事も珍しくはなく、二大家がその大元締めにあたり、ほとんどの者はどちらかの傘下に入っている。

◆西方　　せいほう

刀郷の外。日本本土。

特に関西地方にある首都を指して言う。

◆四聖　　しせい

二大家の抱える大幹部格の呼称。四天王にあたる者達で、シマ（領地）の四隅を護る役目をおう。一人一人が組長が務まるほどの強者揃い。

and more...